

聖霊と宣教

増田 誉雄

序

「私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。

それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした」(Iコリント二・四―五)。

使徒パウロはここに宣教が聖霊のわざとしてなされなければならないことを明白に告知している。同時に、聖霊は、宣教のために人を用いられる。実際のところ、弱さだらけ、欠点だらけの人間以外に聖霊は宣教のために用いる手段がないことをここで厳肅な思いで認めなければならぬ。そして、旧約の予言者イザヤのように、認罪、贖罪、聖化、派遣ということなしには、この任務にとっても耐え得ないことに気づくのである。

今回、筆者は、この主題を「使徒の働き」とパウロの手紙のコンテキストの中で論じることになっているが、それ以前の宣教の歴史の脈絡をたどることから本論に入っていくことにする。

一、聖書の中の宣教の歴史

神のことばの告知としての宣教は、旧約のモーセにまでもさかのぼることができ、それはさらにシナゴグ（ユダヤ教の会堂）において継承され、新約時代に入ると、イエスによる宣教となり、やがて、使徒たちにより、聖霊の力によってダイナミックに展開されていく。

旧約時代における宣教

モーセは主の教えを書きしるして、これを祭司たちや長老たちに与え、イスラエルの民が主を礼拝するために集まるときに読んで聞かせるよう命じている（申三二・一九―一九）。祭司たちがこの聖なる責任の継承を守る様子はマラキ書にかいま見ることができ。

「祭司のくちびるは知識を守り、

人々は彼の口から教えを求め。

彼は万軍の主の使であるからだ」

（マラキ二・七）

エズラの時代になると、レビ人たちが、イスラエルの民に「律法を解き明かした。」そして、「彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した。」（ネヘミヤ八・一一八）。

この形は、中間時代のシナゴグの歴史の中でも守られ、律法と預言書との朗読がなされ、説明が加えられた。

旧約時代のこのような宣教形式は新約時代にも存続していく。福音書中のイエスの宣教の描写にもそれを見ることができ。

主イエスの宣教

主イエスのご自身の宣教のわざの中で、旧約時代からの宣教のコンテキストを用いられて、預言の成就としてのご自身を啓示しておられる。ナザレの会堂でのこととして、「いつものとおり安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた。」と記されているが、イエスは、この機会をとらえて、イザヤ書六十一章二節がご自身についての預言であることを示され、聞いた者たちは、「みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。」という評価を得ている。しかし、福音の真髄が語られると、人々はイエスを排除しようとした（ルカ四・一六―三〇）。

初代教会における宣教

使徒パウロの宣教も、イエスの宣教のパターンを受けついでている。その良い例がピシデヤのアンテオケで、安息日に会堂内で起こっている。「律法と預言者の朗読」の後、会堂の管理者たちの求めに応じてパウロは奨励をした（使一三・一四―四三）。

さらに、「使徒の働き」の中で、クリスチャンたちが、「週の初めの日に」パンを裂くために集まり、パウロが夜

中まで語り続けるうちに、青年ユテコが三階から落ちてしまうという出来事が起こるが、当時の集会の様子がそこ
うかがえる（使二〇・七一―一二）。

やがて、シナゴグから独立していく、クリスチャンたちの集会では、使徒たちの手紙を朗読することが導入され
ることになる。その例をコロサイ、ラオデキヤ、テサロニケの教会に見ることができ（コロサイ四・一六、エテ
サロニケ五・二七、IIテサロニケ三・一四）。

また、パウロは宣教のあり方について、自分の霊の息子テモテに、「聖書の朗読と勧めと教えとに専念なさい。」
と指示している。そして、それを聞く人たちが救われることを強調している（エテモテ四・一三一―一六）。

以上の観察から明白なことは、初代教会においては、宣教のパターンとして、聖書の朗読がなされ、ついで、「勧
め」（パラクレーシス）と「教え」（ディダスカリア）がなされた。このようなことばの告知としての宣教は、教
会の歴史の中で、時として、暗黒時代を通りつつも、綿綿と継承され、尊ばれてきた。

二、主イエスの宣教命令

主イエスの出来事——受肉、十字架の死、復活、昇天——を起点とする福音の宣教は、イエスご自身の宣教命令
という厳粛な事実が土台となっている。したがって、クリスチャンはこの命令——同時に委任——への忠誠として
宣教の働きにつくのである。

「天の御国のかぎ」の委任としての宣教

ピリポ・カイザリヤでの父なる神の啓示によるペテロの信仰告白は主イエスよりの宣教の委任・命令をいただく
こととなる。

「わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつなぐ
れており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています」（マタイ一六・一九）。

「つなぐ」とは「禁止する」ことであり、「解く」とは「許可する」ことである。ペテロには天の御国の門を開閉
する執事としての責任が委ねられたわけである。ペンテコステの宣教において彼はまずその責任を果たすこととな
り、「三千人ほどが弟子に加わる」（使二・四一）。さらに、コルネリオの回心から始まって異邦人世界へと「天の御
国」の門は開かれていく（使一〇）。こうして、福音の告知を受け入れる者には御国は開かれ、拒絶する者には閉ざ
されることになる。この委任・命令はペテロのみならず、主に従うすべての者の責任となるわけである。

復活の主の派遣としての宣教

復活の主は弟子たちに現われて、派遣・命令を与えられる。

「イエスはもう一度、彼らに言われた。『平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたし
もあなたがたを遣わします。』」

そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』

あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それ
はそのまま残ります。』（ヨハネ二〇・二二―二三）。

ここでは、ピリポ・カイザリヤでの委任・命令には出てこない新しい要素が示されている。第一に、主の派遣という要素がある。それは、父なる神によって派遣されたイエスが成就された贖罪の福音を伝達するという達成された神の御旨の告知としての宣教である。ここに永遠の神の御旨である贖罪との連続性がある。派遣された者は、何か新しいことを伝えるのではなく、イエスによって成就されたことを伝えるのである。

第二の要素は、「聖霊を受ける」ということである。主イエスの派遣としての働きは、聖霊によることなしには不可能である。ここに贖罪の告知としての宣教が三位一体の神のわざによるものであることの認識が求められるゆえんがある。

第三の要素は、「罪の赦し」のための宣教ということがある。福音の告知がなければ、人は罪の中に滅亡していく。したがって、宣教の責任は大きい。同時に、神のことがこうして伝えられるとき、受け入れられるならば、赦しが与えられるが、拒絶されるときは、赦しが与えられない厳粛な結果が生じる。

復活の主の権威による宣教命令

「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても、地においても、いつさいの権威が与えられています。』

それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としないさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。』(マタイ二八・一八―二〇)。

おそらく、宣教大会と呼ばれる集会で、この聖句が引用されないことはないと言ってよいほどの宣教のチャレンジの主のみことばである。まず、命令を与えているお方への認識が求められている。それは、「天においても、地においても、いつさいの権威が与えられています」お方である。すなわち、全宇宙的権威を持っておられる主権者なる方より発する命令である。それゆえ、命令を受ける者は絶対的服従をもってひれ伏し従うのである。このような絶対者に対する忠誠としての宣教のおごそかさ、現在見失われていることはしばしば、キリスト教界の霊的指導者たちによって指摘されているところである。

つぎに、この命令は四つの行為を応答として求めている。行くこと、弟子をつくること、バプテスマを授けること、教えることである。行くことと弟子づくりとは「あらゆる国の人々」を対象としているゆえ全世界を包含している。バプテスマは父・子・聖霊の御名によるという二位一体の神ご自身との生きた霊的経験を示している。「エイヌ」というギリシア語の前置詞が「中へ」「中に」という意味をもっていることがこの三位一体の神との生きた結合を裏づけている。教えることは、イエスの啓示のすべてである。しかも「守るように」教えるのであるから、単なる知識の伝達ではなく、霊的生活実践としての指導を意味している。

このような宣教命令を遂行することは、主イエスの臨在なしには不可能である。それゆえ、主の臨在をとまなつた宣教命令がここにある。それは、「いつも」とあるように常在であり、「世の終わりまで」とあるように、主の再臨によって現在の歴史に終止符がうたれるまで続く。この最後の句こそ、多くの宣教者たちを地の果てにまで送り出した方の根源であり、いのちをかけて彼らが出て行った理由でもある。

以上のように、主の宣教命令には神的発動があり、クリスチャンは主への忠誠としてそれに応答し、三位一体の神のわざとしての宣教にインマヌエル(神共にいます)の名を持たれる方の臨在と共に励むのである。

三、「使徒の働き」の中の宣教

「使徒の働き」はギリシヤ語ではプラクセイス・アポストローン、すなわち、「使徒たちの活動」である。よく、「聖霊の働き」の書があるとも言われているが、聖霊の絶えざる力あるわざに使徒たちが丁度、「手足」のように用いられて、イエス・キリストの福音が当時のローマ帝国の世界に宣べ伝えられ、宣教の実が結ばれていった様子が記録されている。使徒たちの中に原動力として満ち、働かれる聖霊のわざを見ると、宣教が単なる人間の活動によるものでないことをまず認めなければならない。

また、「使徒の働き」は著者ルカが意図した記述としては完成したものはあるが、初代の使徒団を通して始められたイエス・キリストの宣教は後続の者たちによって、聖霊の働きによるものとして今日まで進められてきたし、今後も新しいページが「現在に生きる使徒たちの活動」として書き加えられていかなければならない。その活動は主の再臨によってこの世の終末が到来するまでいろいろの試練や迫害にも打ち勝って前進していくのである。

さて、「使徒の働き」は新しい聖霊の時代の到来の記述をもって始まるが、全体を通して、「聖霊」が七十回ほど用いられており、各章における主役はまさに聖霊である。

聖霊降臨の約束と成就

イエス・キリストの福音の宣教者に対する主ご自身の命令は、まず聖霊降臨を待ち望むことであった。

「さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい」(ルカ二四・四九)。

これは主イエスの死と復活を宣教し、「罪の赦しを得させる悔い改め」を宣べ伝える者への条件であった(ルカ二四・四六―四八)。

同じ命令・条件は「ルカの福音書」の続編である「使徒の働き」の初めの部分にも出てくる。

「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。

ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです」(使一・四―五)。

しかし、主イエスのことばは使徒たちには全く通じない。神のご計画が人知を越えたものであることがここで証明される。そして、聖霊降臨の約束が与えられることになる。

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」(使一・八)

このように、全世界に出て行って福音を宣べ伝える命令を与えられた主は、さらに、聖霊による力を受ける命令を与えられ、同時にそれを宣教者の条件とした。ついで、それは約束ともなり、ペンテコステの日に成就された。この約束と成就なしには主イエスの福音の宣教は成り立たない。

聖霊が臨み、力を受けた結果として「証人」となるという表現が用いられているが、驚くべきことは、「証人」(マルテュス)はまた「殉教者」をも意味していることである。実に、主の体なる教会の歴史には「殉教者」の血が厳粛に流れている。現在も、世界のある地域ではこの血は流され続けている。

さて、八節に記述されている地名は「使徒の働き」の内容のアウトラインでもある。一―七章はエルサレム、八―九章はユダヤとサマリヤ、一〇―一八章はカイザリヤからローマまでと展開されている。それはそのまま、「地の

果てにまで」と世界宣教の歴史がたどる道を示している。

聖霊降臨の約束の成就としてのペンテコステの出来事は世界宣教の起点となった。それは圧倒的な神的・超自然的現象をもなった(使二・一一―一三)。まず「激しい風が吹いて来るような響き」はエゼキエルの枯骨の谷に吹いて干からびた骨を生き返らせた「息」、すなわち人を生かす神の霊の大いなる力を示している(エゼキエル三七・九―一四)。次に、「炎のような分かれた舌」はモーセに現われた燃える柴のように神の臨在のしるしである(出三・二)。さらに、「他国のことば」は全世界へと広がっていく福音の宣教を象徴している。神の力と神の臨在による世界大のコミュニケーションとしての宣教のわざがここに示されている。

ルカは、集まっていた大勢の人々が、「それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、驚きあきれてしまった」(二・一六)と描写しているが、ペンテコステの出来事がバベルの塔ののろいの見事な逆転事であったことを見ることができる(創一一・一―九)。バベルで人間の言語は、神の裁きとして混乱させられ、人々は離散させられてしまった。しかし、今や、神の救済のわざによって、キリストにあつて、言語の障壁は取りのけられ、人々は神の国にひとつとされるのである。まさに、主イエス・キリストにある新しい時代の始まりである。

このように、聖霊降臨の約束の成就としてのペンテコステは、主イエスの十字架、復活、昇天とともにくり返して起こらない、一度限りの歴史的な出来事として与えられた。そして、使徒たちは聖霊に満たされて、キリストの宣教命令に従って、主の証人・殉教者として出ていった。

興味のあることに、「使徒の働き」の中における宣教の進展は二人の主要人物によって二部に分けることができる。第一部は一章から二二章までで、活躍しているのはペテロである。第二部は二三章から二八章までで、パウロが活躍することとなる。福音の宣教というところで、両者の間でいちじるしく対照的に出てくる表現がある。聖霊はペテロをして、ユダヤ人たちに、「悔い改めなさい」(使二・三八)と迫らせているが、異邦人たちには、パウロをして、「主イエスを信じなさい」(使一六・三二)と語らせている。この用語の違いの理由は、ユダヤ人は、メシヤに対する拒絶の態度を変える必要があったからであり、異邦人の場合は、全く新しくメシヤを心に受け入れることが必要とされていたからであることができる。後者にはユダヤ人のような先入観がなかったと見ることができさる。

ペテロを通しての聖霊の働きとしての宣教

聖霊の力を受けて、証人・殉教者として遣わされて活躍する使徒たちは、文字通り、宣教の結果として、迫害に直面し、「使徒の働き」の第一部の中でキリストの教会の最初の殉教者を出す、この第一部中の主要人物ペテロに焦点をしばって考察していくことにする。

ペテロによる使徒的宣教(二章)〈

ペンテコステの出来事に「いったいこれはどうしたことか。」と驚いている群衆に対して、使徒的メッセージの本とも言える応答が与えられている。まず、その出来事が、旧約のヨエルの預言の成就であることを指摘し、「ナザレ人イエス」の十字架と復活を語り、さらには、今見聞したばかりの出来事がイエスが「お注ぎになった」聖霊によることを明らかにしている。すなわち、イエスを中心とした福音の核心の提示が鮮明になされている。

ここで見落としてならない重要な要素として強調しなければならぬことは、十字架と復活をはさんで、前後の出来事にペテロが言及していることである。ペテロが宣教するイエスはナザレのイエスであり、このお方によって

神は「力あるわざと、不思議なわざと、あかしの奇蹟」をその公生涯で行なったのである。そして、復活後には神の右に高揚されたイエス、聖霊を注ぐイエス(二三三)、「主ともキリストともされた」(二三六)お方である。かつてピロ・カイザリヤで、「あなたは、生ける神の御子キリストです」(マタイ一六・一六)。と勇氣ある告白をしたペテロは、ここでも、同じ神の啓示によって大胆に「神・人」主イエス・キリストを告白している。

聖霊の力による使徒的メッセージは、人々の心を刺し、悔い改めて、バプテスマを受け、聖霊を受けた者たちは「三千人ほど」もおこされた。

やがて、二回目の説教をペテロは、「生まれつき足のきかない男」のいやしを契機としてする(三三章)。ここでも聖霊のわざがなされ、「みことばを聞いた人々が大きい信じ、男の数が五千人ほどになった」(四・四)。

△宣教の結果としての教会形成▽

ペンテコステの日の聖霊降臨はキリストの教会の誕生となった。ペテロの使徒的宣教の結実はこの誕生したばかりの教会に加えられることになったが、聖霊の働きによる教会としての特質をそこに見る(二一・四二―四七)。

第一の聖霊による特質は、「彼らは使徒たちの教えを堅く守」っていたことである。誕生したばかりの教会の基盤は使徒たちの教え(デイダケー)であった。聖霊による教会は主観的体験や神秘的体験を重んじたのではなく、また、最近よく言われているように、人間の必要に答えることに励むのでもなく(だからと言って、筆者はそれを無視することを説いているのではない)、ひたすら、使徒たちの教えを忠実に学び、従うことにとめた。この優先順位が狂ってしまうと、もはや、聖霊による宣教に基づいた教会ではなくなってしまう。

この使徒たちの教えの權威は、「多くの不思議なわざとあかしの奇蹟」(四三)によって裏付けられていた。聖書の中の奇蹟は、神のわざの新時代の到来にあたって用いられる人物が神より立てられた者であることを証明する目的を持っている。したがって、その神に起因する奇蹟は、いわゆる四大啓示期と呼ばれるモーセの時代、エリヤとエリシャの時代、主イエスの公生涯、使徒時代に集中している傾向性を持っている。勿論、他の時代の奇蹟を否定しているのではなく、使徒の權威の裏付けとしての使徒のしるしということと論じているのである。今日では、この「使徒たちの教え」は神のことばとしての聖書の中にあり、教会はこの權威ある聖書の教えを忠実に学び、それに従うのである。そこに聖霊による教会の形成がなされていく。

実に、教会であれ、個人であれ、聖霊に満たされている明白な証明は、みことばに対する飢えかわきであり、また、みことばの權威への絶対服従である。さらに、この飢えかわきと服従のあるところには聖霊も働かれ、神の栄光のみわざを見ることができるといえる。

第二の聖霊による特質は、「交わり」である。それは、聖霊による、神の臨在の中にある、キリストの救いにあずかった者同志特有のものである。ペンテコステ後の具体的「交わり」の様子は、「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた」(四四―四五)と描写されているが、「必要に応じて」の分配は、今日、聖霊に満たされた教会内でのクリスチャン同志のわかち合いや配慮の原則を示している。愛による、溢れ出る、豊かに与え合う心と実践がそこには存在する。

第三の聖霊による特質は「パンを裂き、祈りをしていた」ことである。この二つの表現は共にギリシャ語では定冠詞がついているゆえ、愛餐をともなった聖餐式をさし、かつ、新しい信仰共同体の祈禱会を示しているとされている。その様子は美しくも見事に描かれている。

「そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をもとにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた」(四六―四七)。

ここに初代教会の集会の様子がかいま見られる。ひとつは「宮」における形式のととのった礼拝であり、もうひとつは形式にこだわらない家庭集会である。両者のバランスのとれた教会形成はまさに聖霊のなせるわざとしか言いようがない。

しかも、聖霊による情緒面が説得力を持っている。内部には「喜びと真心」に溢れる敬虔さが見られ、外部からは「好意」が持たれている。

また、「一同の心に恐れが生じ」(四三)というのも、敬虔な畏敬の念とすることもできる。それは教会内外共に見られたことであろう。絶対的に聖なる神の前における厳肅な畏敬の念のともなった礼拝も、くつろいだ、清らかな喜びのある集会も共にバランス良く保たれることが必要とされる。

第四の聖霊による特質は「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった」(四七)に示されている。聖霊のわざとしての教会には伝道的結実が見られる。「すべての民に好意を持たれた」教会の伝道力がここにあるが、それは本質的には、主が「加えてくださった」ことであつた。

また、「毎日」という表現には、聖霊に満たされた「証人」たちによって成る信仰共同体の絶えることのない、生活とことばによる証言としての宣教があつたことがうかがわれる。

〈ペテロをはじめとする使徒団の宣教の姿勢〉

聖霊は真理の御霊として、ペテロの宣教の中で使徒的福音の提示のあり方を導き、さらに聖霊の働きによる教会形成の基礎を据えられた。ここではなおも前進していく宣教の中で聖霊はどのようにペテロをはじめとして使徒たちの中に働き、励まし、用いられたかを見ることにする。

福音の宣教は当初からユダヤの指導者たちによって反対され、その「権威」のよりどころについて尋問されるが、ルカは「ペテロは聖霊に満たされて」答えたことを記している(四・五―二二)。その内容はもはや変わることのない使徒的宣教であり、その姿勢は聖霊の力による「証人」そのものの確信と大胆さである。ここにその描写を見ることにする。

「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです」(四・一二)

「彼らはペテロとヨハネの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であることを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかつて来た」(四・一二)

「ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。『人に従うより、神に従うべきです。』

私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。

そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。

私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です」(五・二―九―一二)。

こうして、聖霊によって励まされてペテロたちは投獄されたり、ステパノの殉教を出したりという迫害の中を通りつつも宣教し続け、ユルネリオの出来事を契機として、聖霊のみわざとしての異邦人伝道が開始され、やがて、

宣教はエルサレムを中心としたものから、アンテオケを中心とした形態へ、宣教に用いられる中心人物はペテロからパウロへと移行していく。この移行のプロセスの中にも、歴史を主権的に支配される神のみわざが存在することを知らることができる。

パウロを通しての聖霊の働きとしての宣教

主イエスの「弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて」（九・一）いた男がダマスコ途上で、復活の主の顕現により奇蹟的回心をした。以来、人類の歴史は大きな影響をこの人物から受けてきた。この迫害者パウロは、主の圧倒的主権的力によって使徒パウロと変えられることになり、やがて、初代教会の宣教の中心人物となる。このパウロのゆえにキリスト教はユダヤ教から脱皮し、世界宗教となったとさえ評価されるにいたる。

パウロの回心当初の初代教会の状況を最も良く記述している聖句のひとつが次のことばであろう。

「こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った」（九・三一）。

「聖霊に励まされて前進し続けた」はまさにパウロを通しての宣教についても最適の表現である。いよいよ、パウロは「聖霊に遣わされて」（二三・四）三回にわたる伝道旅行に出、さらにローマにまでいたる。そこで、聖霊によるわざとしてのパウロの宣教の出来事をいくつか挙げてみることにする。

○地方総督セルギオ・パウロは、「聖霊に満たされ」たパウロによる出来事を見、「主の教えに驚嘆して信仰にはいった」（二三・四―一二）。

○ピシテヤのアンテオケでのパウロの「奨励のことば」の結果として、ユダヤ人たちの扇動による迫害がおこりはしたが、異邦人たちは、喜びと賛美をもって信仰に入り、「弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた」（二三・四―五二）。

○パウロは、「アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられた」（二六・六）。また、「ピシテヤのほりに行く」としたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった」（二六・七）。そして、パウロはマケドニアへ導かれた。

○「パウロは御霊の示しにより、マケドニアとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした」（一九・二一）。

○パウロはエペソの長老たちへの別れのことばの中で聖霊による任命を教えている。

「あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです」（二〇・二八）。

○パウロの宣教を受け入れないユダヤ人に対して、それが聖霊が預言者イザヤを通して彼らの先祖たちに語られたとおりであることを指摘している（二八・二五―二八）。

こうして、聖霊による宣教としてパウロは働き、ついにローマにまでいたる。彼の活動は最高の表現でまとめられている。

「大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエスのことを教えた」（二八・三一）。

主イエスご自身が、「御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです」（ヨハネ一六・一四）と語られたが、このパウロについての最後のまとめのことばは、「使徒の働き」に記述されて

いる聖霊による宣教がまさにイエスへの栄光のためであることを確認して結んでいる。

四、パウロ書簡の中にみる聖霊と宣教

この課題を扱うにあたって、まず、その土台ともなるパウロの宣教者としての自己認識から始めることにする。

〈パウロに対する復活の主の顕現と啓示と召命〉

パウロの宣教の根拠は、すぐれてその回心経験に見られる復活の主の顕現にある。「そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました」(イコリント一五・八)と述懐している。この顕現は福音の核心であるキリストの死と復活の出来事とパウロを生命的につないでいる。もはや単なる歴史の出来事で終わってしまうのではなく、パウロにとって救済史的意味を持つものとなった。

キリストの顕現体験はパウロにとって神に由来する啓示となってふくらんでいく。そこで、彼の福音宣教は「人間によるもの」ではなく、「ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです」(ガラテヤ一・一一―一二)としている。しかも、それが聖霊によることを明白にして、「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです」(イコリント二・一〇)と述べている。「神の深みにまで及ばれる」聖霊による啓示というのはこの上もなく驚くべき内容を持った表現である。

以上のような啓示体験と認識はまた、パウロの召命観につながる。彼の福音宣教者としての召命認識は「ローマ人への手紙」の冒頭に明確に提示されている。

「神の福音のために選り分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ、

——この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、

御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、

聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。

このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです」(一・一一―一五)。

このように、パウロ自身が聖霊のみわざであることが分かる。同じことは今日でも言えることであって、宣教者自身が聖霊のみわざであることが宣教のための条件である。

〈パウロの聖霊の働きとしての宣教理解〉

「ローマ人への手紙」からはじまって浮きぼりにされてくるものを枚挙することにする。

- (一) 福音の宣教は返さなければならぬ負債である(ローマ一・一四)。
- (二) 福音は信ずるすべての人に救いを得させる神の力(ローマ一・一六、イコリント一・一八―三二)。
- (三) 福音は信じる者に神の義と神との平和を与える(ローマ一・一七、四・一一五・一)。
- (四) 福音は主イエス・キリストにより永遠のいのちを与える(ローマ五・二一、六・二三)。
- (五) 福音の恵は罪から解放し、神の奴隷とし、聖潔に至る実を与える(ローマ六・二三)。
- (六) キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理は、罪と死の原理から解放する(ローマ八・一一二)。

- (七) 御霊は人を神の子どもとする(ローマ八・九―一六)。
- (八) 御霊の力によりキリストの福音は前進する(ローマ一五・一九、Iコリント二・一―五、IIコリント六・四―一〇)。
- (九) 神の御霊は洗い、聖なる者とし、義と認める(Iコリント六・一一)。
- (一〇) 御霊は神の確認の印であり、保証である(IIコリント一・二二―二二、エペソ一・二三―二四)。
- (一一) 御霊は信じる者を生かし、主と同じ姿に変える(IIコリント三・一一―一八)。
- (一二) 福音の宣教は神の和解の務め(IIコリント五・一一―一六・二)。
- (一三) 福音の宣教は啓示の御霊による(エペソ一・一七、IIテモテ三・一五―一七)。
- (一四) 福音の宣教は力と聖霊と強い確信とによる(Iテサロニケ一・五―六)。
- 以上がパウロの宣教理解をすべて網羅してはいるわけではないが、彼の多面的豊富な理解を知るために、できるだけ彼の用語をそのまま用いて枚挙してみた。福音の宣教は聖霊の働きであるがゆえに人知をはるかに越えて驚異的に豊かである。またそれゆえにこそ、宣教者は聖霊によるのでなければこの任務と責任につくことはできない。それでは、このような宣教によって結ばれる実ほどのようなものなのであろうか。パウロはいかに理解していたのであろうか。

五、聖霊による宣教の実の理解

聖霊による宣教には、それ独特の結実が期待される。「使徒の働き」やパウロの書簡の中にみられる宣教の実に対する呼称は、まさにその神的由来を示し、聖霊の働きなしにはその意味の解明が不可能であることに気づく。ここでも、初代教会のいぶきにふれるために聖書中の表現をそのまま記述することにする。

「使徒の働き」

弟子(二・四一)、信者(二・四四)、しもべたち(四・二九)、聖徒たち(九・一三)、異邦人の光(二三・四七)。

パウロの書簡

「ローマ人への手紙」

義人(二・一七)、罪に対して死んだ者、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者(六・一一)、神の奴隷(六・二二)、御霊に従う者(八・五)、神の子ども(八・二四)、神の相続人、キリストとの共同相続人(八・一七)、あわれみの器(九・二四)、キリストに仕える人(二四・一八)。

「コリント人への手紙 第一」

キリスト・イエスにあって聖なるものとされた方々(一・二)、召された者(一・二四)、神の協力者、神の畑、神の建物(三・九)、神の神殿(三・一六)、キリストのしもべ、神の奥義の管理者(四・一)、キリストのからだの各器官(一一・二七)。

「コリント人への手紙 第二」

キリストのかおり(二・一五)、新しく造られた者(五・七)、キリストの使節(五・二〇)、神の義(五・二

一)、生ける神の宮(六・一六) 神の息子、娘(六・一八)、諸教会の使者、キリストの栄光(八・二三)。
「ガラテヤ人への手紙」

アブラハムの子孫(三・七)、自由の女の子ども(四・三一)、御霊の人(六・一)、神のイスラエル(六・一六)。
「エペソ人への手紙」

御国を受け継ぐ者(一・一一)、神の栄光をはめたたえる者(一・二二)、神の作品(二・一〇)、神の家族(二・一九)、主にある聖なる宮(二・二二)、神の御住まい(二・二二)。約束にあずかる者(三・六)、光の子ども(五・八)。
「ピリピ人への手紙」

世の光(二・一六) 国籍は天(三・二〇)。
「コロサイ人への手紙」

教会に仕える者(一・二五)、新しい人(三・一〇)、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者(三・一二)。
いつも親切で、塩味のきいたもの(四・六)。

「テサロニケ人への手紙 第一」

私(パウロ)たちと主とにならう者(一・六)、神の諸教会にならう者(二・二四)、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠(二・一九)、聖く、責められるところのない者(三・一三)、昼の子ども(五・五)。

「テサロニケ人への手紙 第二」

神の国にふさわしい者(一・五)、主に愛されている兄弟たち(二・一三)。

「テモテへの手紙 第一」

神の人(六・一一)、命令を守り、傷のない、悲難されるところのない者(六・一四)。

「テモテへの手紙 第二」

キリストのりっぱな兵士(二・三)、熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じる
ことのない働き人(二・一五)、主の現われを慕っている者(四・八)。

何と多くの表現で聖霊の実が示されていることであろう。父なる神の深いみ心の中よりいで、主イエス・キリストの十字架と復活によって成就された福音は、聖霊の働きによって、宣教され、人知をはるかに越えた結実をもた
らした。そして、そのみわざは今日も三位一体の神の主権的働きとして前進している。

結 び

「聖霊と宣教」が与えられた課題であるが、以上の考察を通して言えることは宣教は聖霊によるもの以外ではあり
得ないことである。現代は、目に見える現象面にとかく関心が向きやすいが、あくまでも宣教の核心はキリストの
出来事の御霊の力による告知である。「私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれた
ものではなく、御霊と御力の現われでした。それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の
力にささえられるためでした。」(エペソ人への手紙二・四一五)とパウロがそのことを明確にしている。

それゆえ、この宣教に取り組んだパウロは、宣教の動機を「キリストの愛」の迫り(IIコリント五・一四)とし、
その使命を「キリストの使節」としての「神の和解」と受けとめている(IIコリント五・一七―六・二)。したがっ
て、もしこの福音を宣べ伝えないなら、まさに「わざわざ」なのである(Iコリント九・一六)。

参考文献

- J・ハーバート・ケイン 「聖書から見た世界宣教」(いのちのことば社 一九八二年)
ジョン・ストット 「ローザンヌ誓約——解説と註釈」(いのちのことば社 昭和五十一年)
ジョン・ストット 「初代教会の福音宣教」 『日本をキリストへ 日本伝道会議講演集』(日本福音同盟 昭和四十九年)
ウィリアム・バークレー 「使徒行伝」 『聖書註解シリーズ七』(ヨルダン社一九七七年)
J・シドロー・バクスター 「旧新約聖書全解」(いのちのことば社 一九八三年)
Ladd, George Eldon, A Theology of the New Testament (William B. Eerdmans Publishing Company, 1974)
Bruce, F. F., The Book of the Acts (The New International Commentary on the New Testament, Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1960)
Westcott, B. F., The Gospel According To St. John (Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1954)

(お茶の水聖書学院・学院長)